

「Z会の映像」 教材見本

こちらの見本は、実際のテキストから1回分を抜き出したものです。

ご受講いただいた際には、郵送にて、冊子をお届けします。
※実際の教材は、問題冊子と解説冊子に分かれています。

教材見本内の「添削課題」は、演習問題として扱っており、
添削指導はおこなっていません。ご了承ください。

12章 イギリス産業革命とアメリカ合衆国の独立

要点

重要ポイント

17世紀の2つの革命により、市民の自由な経済活動へ向かったイギリスでは18世紀を通じて資本の蓄積・市場の獲得・安価な労働力が準備される。産業革命はこれらの条件の下、毛織物業でなく、奴隷貿易の副産物として成長する綿織物業から始まる。産業革命の中心地は最大の奴隷貿易港リヴァプールのあるランカシャー地方であった。

北アメリカのイギリス植民地は、世界経済の覇権を握ったイギリスに対する独立戦争に勝利し、三権分立の民主主義に基づく連邦共和国として独立した。

■確認問題

1. 第2次囲い込み運動に伴ってイングランド全土に普及した大麦→クローバー→小麦→カブの四輪作による農法を何と呼ぶか。
2. 中世以来イギリスの代表的な産業で、マニュファクチュア経営が展開した工業は何か。
3. 18世紀、毛織物工業に代わりイギリスの中心的工業となったのは何か。
4. 飛び杼を発明したのはだれか。
5. ミュール（走錐）紡績機を発明したのはだれか。
6. 蒸気機関を利用した力織機を発明したのはだれか。
7. イギリス産業革命期に、内陸水上輸送の手段として建設された施設は何か。
8. 高性能の蒸気機関車を発明し、鉄道輸送の時代をひらいた発明家はだれか。
9. 産業革命の結果ランカシャー最大の綿工業都市となったのはどこか。
10. 19世紀初期、イギリス中・北部の織物工業地帯で発生した手工業者・労働者の暴動を何というか。

■解答

1. ノーフォーク農法
2. 毛織物工業
3. 木綿工業
4. ジョン＝ケイ
5. クロンプトン
6. カートライト
7. 運河
8. スティーヴンソン
9. マンチェスター
10. ラダイト運動

①産業革命

◎産業革命がイギリスで発生した理由

- 資本の蓄積

貿易・商業の発達による（とくに奴隷貿易は1713年のユトレヒト条約でイギリスが奴隷貿易独占権であるアシエントを獲得したことで発展）

- 毛織物分野での問屋制・工場制手工業の発達

- 広大な市場…植民地戦争に勝利し獲得

- 豊富な賃金労働者の存在

農業革命の進展により穀物生産力が上昇し人口増加を支え、第2次囲い込み運動で離農が進行

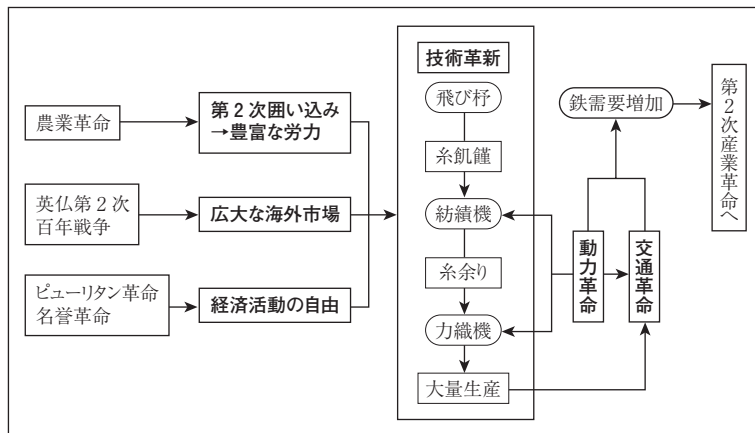
- 豊富な地下資源の存在…鉄・石炭・水

- 17世紀の市民革命によって封建制が消滅

- 技術・経済思想の進歩

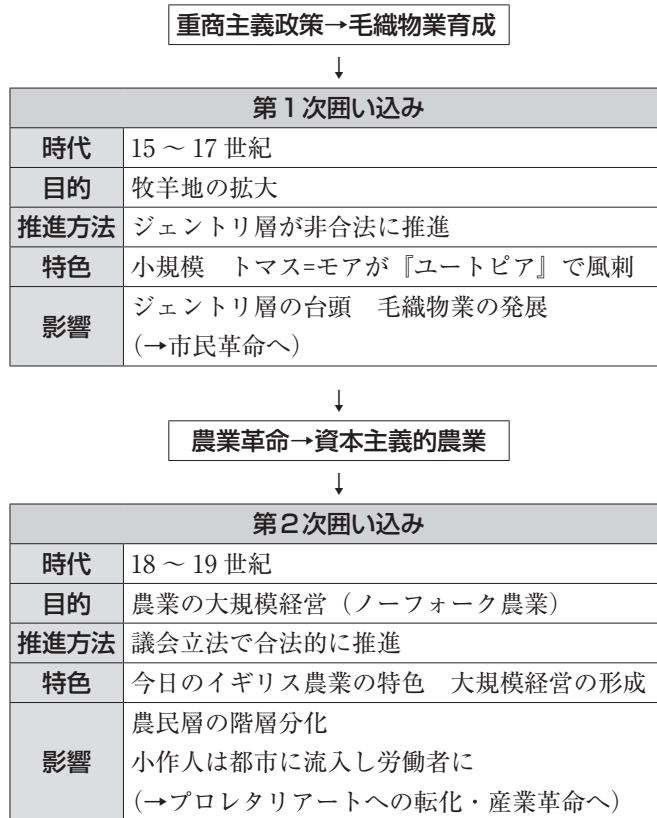
17世紀からの自然科学の進歩や経済における自由放任思想の浸透

▼イギリス産業革命の構造



◎**囲い込み運動**：地主や富裕農民が開放耕地や共有地を囲い込んで私有化する運動

◆**囲い込み運動**◆



*** ノーフォーク農法**

18世紀からイギリスのノーフォーク州で始まった4年周期の輪作

大麦→クローバー→小麦→カブの輪作で、三圃制での休耕地を無くした輪作（クローバーは冬期の家畜の飼料として利用）

◎産業革命の開始（木綿工業からの開始）

- 18世紀から東インド会社によるインド綿布のイギリスへの流入
イギリス国内やアメリカ植民地での綿織物への需要増加やアフリカからの奴隷の対価として綿布の需要が増大した。
 - ジョン=ケイによる飛び杼^ひの発明（1733）
→綿織物の生産増大に伴う綿糸の不足
 - ハーグリーブズによるジェニー紡績機の発明（1764頃）
 - アークライトによる水力紡績機の発明（1768）
 - クロンプトンによるミュール紡績機の発明（1779）
 - カートライトによる力織機の発明（1785）：蒸気機関を動力に利用
 - ホイットニー（アメリカ）による綿繰り機の発明（1793）
- ※これらの諸発明により機械制工場が建設され、イギリス産業の中心は木綿工業となる

◎蒸気機関

- ニューコメン…炭坑の排水ポンプに蒸気機関を実用化
 - ワット…蒸気機関の改良
→蒸気機関は紡績機・織機・交通分野で利用拡大
- ※紡績・織布・動力の諸部門の発達により木綿工業が繁栄し、機械工業や鉄工業といった重工業部門の技術革新、石炭の採掘などを促した。
- ※ダービー父子によるコークス製鉄法の開発→石炭の需要が増大

◎交通革命

- ※動力部門での蒸気機関が運輸動力にも利用される。運河の建設も盛んとなる。
- トレヴィシック…蒸気機関車を発明（1804）
 - フルトン（アメリカ）…蒸気船を実用化
サヴァンナ号が蒸気船として初めての大西洋横断に成功（1819）
 - スティーヴンソン…蒸気機関車を実用化
ストックトン・ダーリントン間で実用化（1825）
リヴァプール・マンチェスター間で本格開通（1830）

◎産業革命の社会的影響

- マンチェスター（木綿工業）、リヴァプール（マンチェスターの外港）、バーミンガム（製鉄業・機械工業）など都市の発展

→人口集中による過密・不衛生な生活環境の出現など都市問題の発生

- 資本主義体制の成立

生産手段を有する**資本家**が**労働者**を雇って商品を生産し、利益確保をめざす経済・社会システム。

- 労働問題の発生

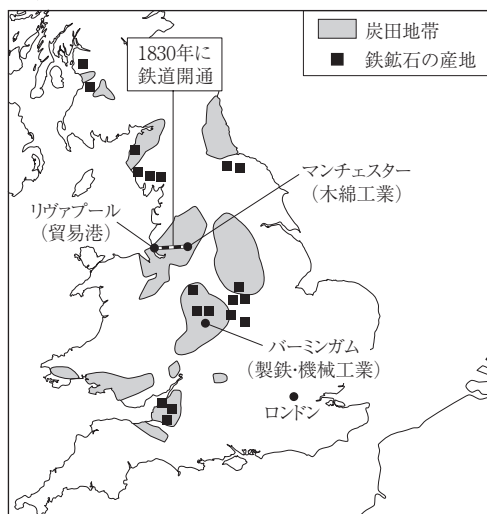
長時間労働や**女性・年少労働者**の酷使→工場法制定へ

失業した熟練工や手工業者による**機械打ち壊し運動（ラダイト運動）**の発生

- 社会主義思想の展開

資本主義のもたらす問題を資本主義では解決できないとして、社会主義思想が広まる

▼産業革命期のイギリス



②アメリカ独立革命

◎イギリス植民地の発展

- **13 植民地**の形成：イギリス本土から移住した人々が1732年までに形成
→いずれも**植民地議会**が存在し、自治権も持った

◎イギリスの重商主義政策

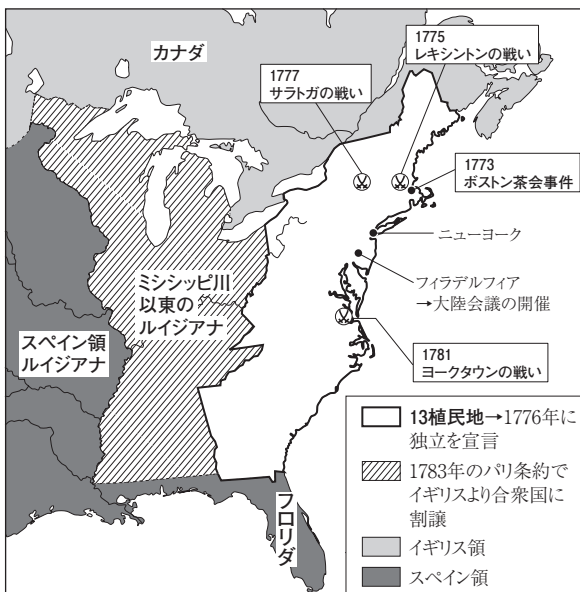
- **七年戦争**後、イギリス本国の財政が窮乏
戦費・植民地防衛費と称して植民地に対する重商主義政策を強化
 - ① **砂糖法**（1764）…砂糖・糖蜜への輸入税
 - ② **印紙法**（1765）…書類・刊行物への徴税
→植民地で大規模な反抗運動（“**代表なくして課税なし**”）が起こり、翌年撤回される
 - ③ **タウンゼンド諸法**（1767）…茶・ガラス・紙・ペンキなどに輸入関税を課す。
 - ④ **茶法**（1773）…イギリス東インド会社にアメリカ植民地に対する茶の独占権を与える。
→**ボストン茶会事件**（1773. 12. 16）…ボストンに入港していた東インド会社船の積荷を海中へ投棄する。以後本国の弾圧は強化された。

◎アメリカ独立戦争（1775～83）

- イギリスが茶法をめぐる植民地の対応に制裁措置を採ると、植民地側は第1回**大陸会議**（1774）を**フィラデルフィア**で開催し、13植民地が共同でイギリスの不当課税に抗議し、通商断絶同盟の結成を宣言した。
* “自由か、死か”…パトリック=ヘンリ
- 植民地の人々は、**愛国派**（中小商工業者や自由農民など、植民地人口の約3分の1。独立支持層）、**国王派**（主に高級官吏、国教会聖職者、大商人、大地主など。植民地人口の少なくとも1割。反独立派）、**中立派**（本国との和解を望む）に分かれた。

- **レキシントンの戦い**（1775）で本国軍隊と植民地兵の武力衝突が勃発し、独立戦争が始まった。第2回大陸会議（1775）で**ワシントン**が総司令官に就任し、**トマス=ペイン**著『**コモン=センス（常識）**』（1776）は植民地の独立気運を高めた。
- 1776年7月4日には**ジェファソン**が起草した**独立宣言**が発表された。この宣言はロックやルソーの啓蒙主義の影響を受け、基本的人権・主権在民・革命権や、植民地の連合諸州の自由と独立を主張している。
- **ヨークタウンの戦い**（1781）において米仏連合軍がイギリス軍に圧勝し、実質的に植民地側が勝利を収めた。
- **パリ条約**（1783.9）の締結：独立戦争終了
イギリスは13植民地の完全独立を承認
ミシシッピ川以東のルイジアナを割譲

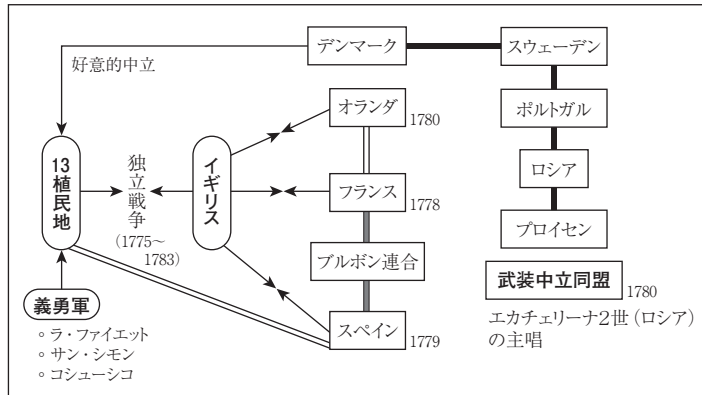
▼合衆国独立後の北アメリカ



◎アメリカ独立戦争の国際関係

- フランス大使フランクリンの活躍によりフランスが参戦 (1778), フランスと同盟してスペイン・オランダも参戦してイギリスは孤立を深めた。イギリスの海上封鎖に対抗してロシア皇帝エカチェリーナ2世は武装中立同盟 (1780) を提唱, スウェーデンやデンマーク, プロイセン, ポルトガルなどが参加した。ラ=ファイエット・サン=シモン・コシューシコらは義勇兵として植民地側で参戦した。

▼独立革命時の国際関係



◎市民革命としてのアメリカ独立

- 本国イギリスの王政を否定し共和政を採用，封建的諸制度を撤廃した。独立（革命）前の本国と結んだ特権層（**国王派**・ロイヤリスト）と独立戦争を指導した愛国派（**独立派**・パトリオット）との間の階級間の争いの側面を持ち，結果として新興の商工業ブルジョワジーが台頭した。イギリスの重商主義政策による圧政からの解放と信仰の自由も確立された。

◎合衆国憲法の制定

- アメリカ連合規約の制定（1777. 11, 81年に発効）
 - 大陸会議が承認したアメリカ合衆国最初の憲法
 - アメリカは13州から成る連合国家であることを宣言
 - 連邦の権限を制限し，各州は独立と主権を保つ
 - 連邦政府は徴税権・通商規制権・常備軍の保持は許されない
- **アメリカ合衆国憲法の制定**（1787）
 - 連邦主義**…アメリカ連邦政府の権限強化。徴税権・通商規制権を有する
 - 三権分立**…国家権力を議会（立法）・政府（行政）・最高裁判所（司法）に分担させる
- **ワシントン**が初代大統領に就任（1789）
- 政党の基盤の誕生
 - 連邦派**（フェデラリスト）
 - …連邦政府の権力の増大と州権の縮小を主張。ハミルトンが中心的人物。憲法草案を支持した。
 - 反連邦派**（アンチ=フェデラリスト）
 - …州の権限の保持を主張。**ジェファソン**が中心的人物。憲法草案に反対した。

■例題2

《イギリスにおける農村社会の変動》★★★

世界史における農村社会の変動について、下記の設問に答えよ。

18世紀イギリスでは、農村社会に大きな変化が起こり、それが工業化にも一定の影響を与えた。この変化について、90字以内で記せ。

(東大【2】(A)・1994年)

■解答例

増加する都市人口への食糧増産のために四輪作法が普及した。そのために第2次囲い込みが行われ、資本主義的農業経営が一般化するとともにヨーマンは没落し村落共同体は解体した。

(83字)

四輪作法の普及と第2次囲い込みの進展は集約的な大農場経営を促し、失地農の一部は都市の工場労働者となった。都市人口増加等による食料需要増加は、農業の集約化、資本主義化を加速させた。(89字)

■例題3

《アメリカ独立革命》★★★

イギリスによる植民地支配を脱し、新たな国家の建設に直面したアメリカ合衆国の政治家たちにも、共和主義は大きな影響を与えていた。(a)その中の1人であるハミルトンが指導した連邦派と、これに反対した反連邦派の主張の違いを100字以内で説明せよ。(b)また、反連邦派の中心人物であり、後に大統領となった人物の名前を挙げよ。

(北大【1】問4・2001年)

■解答例

(a) 憲法草案を支持した連邦派は、通商を重視して産業保護推進を唱え、強力な権力を持つ中央政府の樹立を主張した。憲法草案に反対した反連邦派は、農民や小商工業者を支持者とし、各州の主権の尊重を主張した。(96字)

(b) ジェファソン

■例題4

《アメリカ独立戦争》★★★

アメリカ合衆国独立戦争の経緯と独立後の状況を説明せよ。なお独立後の状況は東部13州の性格を考えながら、合衆国憲法をめぐる対立について言及せよ。(250字以内)

(Z会オリジナル)

■解答例

植民地に対するイギリス重商主義の強化に対し、当初は大陸会議を通じた本国政府への抗議を行うに留まったが、レキシントンの戦いにはじまる武力衝突の過程で『コモン=センス』が出版されるなど、本国からの離脱へと主張が移行した。フランス参戦など国際的世論の支持を受けて、1783年にはパリ条約で独立が達成された。独立後は憲法草案に際し、連邦政府の強力な権限を主張する連邦派と各州の主権を主張する反連邦派が対立した。結果として、人民主権・三権分立・連邦主義を原理とする合衆国憲法が1787年に制定された。(241字)

《中世～近代のヨーロッパの人口増加と食糧増産》★★★

中世から近代にいたる西ヨーロッパの人口を正確にとらえることは困難であり、どうしても推計に頼らざるをえないが、歴史家による推計値はかならずしも一定していない。また、人口変動は当然ながら国や地域によって相異なった傾向を示す。とはいえ、長期的に見ると、西ヨーロッパ全体で明らかに次のような三度の大きな人口変動の波を確認することができる。

- (1) 14世紀前半を頂点とする人口増加とその後の減少
- (2) 15 - 16世紀の人口成長と17世紀の人口停滞
- (3) 18世紀後半以降の飛躍的人口成長

これら三つの大きな人口変動をひき起こした要因は多様でありうるが、人口増加を支えた経済的要因としてとくに注目しなければならないのは、農業における食糧増産である。上記の三時期のうち(1)と(3)とでは、食糧増産に結びつく農業の制度的ならびに技術的变化にどのような基本的相違があったか、400字以内で述べなさい。

(一橋大【1】・1996年)

12章 イギリス産業革命とアメリカ合衆国の独立

添削課題

解答例

前者の変化は、賦役の廃止に伴う、領主と農奴の関係が変質したことによる生産意欲の向上と、木製農具を使い人力に依存した耕作から、重量有輪犁などの鉄製農具を使った耕作への移行、三圃式農業により土地の有効利用が可能になったことである。後者の変化は、ヨーマンや借地農による零細的な生産が、囲い込み運動によって、農業労働者を大地主が雇用する大農経営に転換したこと、従来の小型の農具が大型のものにかわり、ノーフォーク農法による、家畜の飼育を伴った混合農業の本格化である。両者の基本的相違は、制度面では、前者があくまで自給食糧生産を前提としたもので、農奴は小作人にとどまったのに対して、後者は都市部への供給を前提とした大地主による資本主義的経営の採用となった点であり、技術面では、前者が休耕地の存在を前提としていたのに対して、後者は、穀物と飼料を交互に栽培することで休耕地を持たなかった点が挙げられる。(393字)

解説

《中世～近代のヨーロッパの人口増加と食糧増産》

農業技術の変化に関するものである。テーマ自体があまり馴染みのあるものではないだろう。また、設問の要求も単に変化を求めているだけではないので、少々とっつきにくいものではないだろうか。しかし、歴史の大きな変革に、食糧生産の要でもある農業技術の進歩が絡んでいることが重要な視点である以上、解法だけでなく、その内容に関してもしっかりと理解しておくべきものである。

まず設問の要求であるが、一見すると、「農業の制度的ならびに技術的变化」という表現から、単純な変化の説明を示すように感じられるだろう。しかし、設問文をしっかり吟味すれば、『2つの時代に起こった農業における変化の基本的相違』が設問の要求となっていることに気づくのではないだろうか。つまり、変化したことそのものが問われているのではなく、その変化の持つ性格の相違が求められているのである。従って、設問文に示されている2つの時期に発生した農業上の変化を羅列するだけでなく、その変化の質がどのように異なっているのかをしっかりと示さなければならないのである。もちろん、そのためには「変化」そのものの具体的内容を把握することが必要となるが、それのみを答案に記載して満足してしまうと、設問の要求に半分も応えられていないことに気付いてほしい。

まずは、設問文に示されている2つの時期に、同様な変化が起こったのかを考えていこう。変化とは、食糧増産が起こった前後の状況が異なっていることをさす。設問の設定から考えれば、(1)の時期については、14世紀前半よりも以前に、この変化が起こっていることになる。つまり11世紀頃の状況に比して、13世紀頃には農業の形態が変わっていたということである。

う（でなければ、14世紀前半をピークに人口が増大しなくなってしまう）。11世紀頃の西ヨーロッパでは、まだ古典荘園が健在で、農奴には貢納（生産物地代）・賦役（労働地代）が課せられていた。しかし、賦役労働は非効率で、農奴の生産意欲を刺激するものではなく、農業生産性は頭打ちの状態であった。また、使用されている農具は木製のものが中心で、人力に頼った農耕が農業生産性の停滞に拍車をかけていた。農法に関しても、略奪農法に近い段階で、地力をいたずらに消費するのみであった。しかし、気候の温暖化や封建社会の安定・成長に伴って、技術革新が行われることで状況は変化した。貨幣経済が復活し、これが荘園経済を変質させていくと、領主たちは賦役を廃止して貢納に一本化した。このことで、蓄財が可能になった農奴たちの生産意欲は向上し、技術革新も大いに進んだ。鉄製の農具が普及し、犁・水車などの改良、牛耕農法の登場などが生産性を向上させた。また、休耕地を設けることで地力の回復をはかる三圃式農業が採用されたことにより、農業生産は増大し、人口は飛躍的に増大した。

次に、(3)の時期については、18世紀前半に起こった変化が、その後半になって飛躍的な人口増大を引き起こしたのだから、17世紀の状況と18世紀前半の状況を対比させればよい。17世紀の西ヨーロッパは、“危機の”という形容詞がつくほど混乱に満ちていた。気候が寒冷化し、疫病や凶作が波状的にやってきては、人々の生活を荒廃させた。このような中、農業技術の進歩も停滞しており、中世末期以来の農法と、中規模以下のヨーマン（独立自営農民）や借地農による生産性の低い耕作が続けられていた。しかし、17世紀末に近づくと、各国の重商主義政策の発展や、国家の統合が進んだことにより国力が増大した。気候の温暖化もあり、人口が増加傾向に入ると、食糧確保のために農業を取り巻く環境は大きく変化していった。従来の休耕地の存在を前提とした三圃式農業から、カブやクローバーの栽培によって地力を回復させつつ、休耕地を設けずに輪作を行うノーフォーク農法が普及し、農業生産力は増大していった。余談ではあるが、東京大学志望者の中で、地理を受験科目としている者は、このような農法やその効果などに触れる機会が多いであろう。それを地理受験のためだけに使うのではなく、このような問題を解く際の“隠し技”として使用できるよう意識をしておいてほしい。

さて、このような状況を背景に、産業革命期を迎えつつあるイギリスを中心に、各国が貿易の拡大をはかると、大都市が登場、その経済活動が活性化していくことになった。さらに、輸出品を生産するため手工業が発展すると、都市への人口の流入が進むとともに、ヨーロッパの人口は持続的に増加することとなった。このことが都市民の穀物需要を高め、高い生産性を求めた動きが農村部でも見られた。大地主たちは村の共有地や小作地を囲い込むことにより、大規模な農業経営を進め、土地を失った農民は農業労働者となると同時に、都市に移住して工場労働者となっていった。経済の発展と安定した食糧供給が実現することによって、人口はさらに増加することになるのである。

以上のような状況から、(1)・(3)の時期における変化をまとめると、次のようになるであろう。この際に、注意しておきたいのは、ただ単に前後の状況を羅列するのではなく、対比すべき項目をしっかりとそろえておく、ということである。「変化」とは同一の事象が、前後において異なることである以上、異なる項目を対比したところで「変化した」ことを証明することにはならないからである。

	(1)		(3)	
	前	後	前	後
制度	貢納・賦役	貢納に一本化	ヨーマン・借地農 による耕作	囲い込みの進展 農業労働者の採用
	農奴の意欲薄い	生産意欲の向上		
技術	木製農具	鉄製農具		
	人力の鋤	重量有輪犁	重量有輪犁	大型の犁の登場
	地力の消費	三圃式農業	休耕地の存在	ノーフォーク農法

これで、第一段階の『農業の制度的ならびに技術的変化』についてはまとめられたことになる。そのうえで、この時に見られた変化とはどのようなもので、そこにどのような基本的相違があるのかを考えていこう。まずは、制度に関して見てみると、(1)の時期に関しては、自給食糧の生産を前提とはしているが、農奴の生産意欲向上に伴って余剰生産物が登場したこと、その一方で、農奴の地位は小作人に留まり、自作農や農業労働者の誕生までには至らなかったことが挙げられる。(3)の時期に関しては、生産の増大が都市部への供給を前提としている点と、土地を離れたヨーマン、借地農が、賃金を生活の糧とする農業労働者となって大規模農業経営者に雇用される資本主義的経営に移っていった点が挙げられるであろう。技術面に関しては、個々の時期において使用される農具にももちろん相違はあるが、木製のものが鉄製に変化して以降、材質に大きな変化はなく、人力から畜力への移行もこの段階では大きな差異とはいえない。それに対して、農法に関しては、休耕地の存在を前提としている三圃式農業から、穀物と飼料を交互に栽培することで、休耕地を必要としないノーフォーク農法へ展開した点は、大きな差異といえるだろう。以上の点を踏まえれば、各時期の変化の基本的差異は以下のようにまとめることができるであろう。

[相違について]

- ①制度に関して…農奴の生産意欲向上（自給食糧生産を前提）に伴う余剰生産物登場に対して、都市部への供給を前提とした農業労働者（賃金を生活の糧とする）を使用した資本主義的大農経営
- ②農法に関して…休耕地の存在を認める三圃式農業に対して、休耕地を設けないノーフォーク農法

変化についての説明が多少長くはなるであろうが、結語としてこの「相違」がはっきり示せるかどうかのカギになるであろう。設問文の意図を読み違えることなく、しっかりその要求に応えられるように練習を重ねてほしい。

解答例は、一定の考え方によって導かれたものである。ゆえに前提（問題の読み取り方）が異なれば、千差万別の解答が出てくることはいうまでもない。解答例や別解を鵜呑みにしないように。あくまで解答にいたるプロセスの一例である。